
冬の花火

はやとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の花火

【Nコード】

N9736N

【作者名】

はやとん

【あらすじ】

猫が空を見上げて思う。

僕は誰も知らない島に住む一匹の猫。気付いたら僕一人しかいなかったから、名前は知らない。というか、ないのだと思う。名前のない僕はいないのと一緒に。誰も僕のことを知らない。一番幼い頃の記憶はとうの前に消えていて、気付いたらここにいたから何もかもがわからない。

今日も鋭い日差しが矢が降り注ぐ。だから僕は緑の葉が生い茂る木の木陰に入って、ぼんやり空を眺めていた。ずっと眺めていたって青空の蒼は変わることないのに、ただ眺めていた。木陰が僕の唯一の友達。僕を強い日差しから守ってくれる。飛行機雲が現れて消えて、何羽もの野鳥が空を跨いで、風が僕の頬を撫でては通り過ぎた。風にのった潮の香と波の音はいつもと同じ。打ち寄せては返すマリンブルーの波と、僕の鼓動の不協和音は僕の心を安らかにしてくれるんだ。海で生命は生まれたと生物学者が言う。それになんともなく共感できる気がした。そうやってぼんやり時間が過ぎ去って、今日も終わっていくのだなと思った。太陽が西の茜色に沈んで、星空が東の藍色からやってきて、また朝が来る。

最初見た時は、こんな綺麗な空どこにもないだろうって感動したんだ。さぶいぼが立って、僕はこの空の下でずっと過ごしていたって思った。だけど、最近なんか違うって思う。違うって言うか、いくら綺麗な空を見ても感動しなくなったんだ。ぼんやり眺める景色は、僕の記憶のコピーでしかない。昨日と同じ光景の繰り返しだ。歳をとるってことはそういうことなのかなって諦めようとしたんだ。けれど、なんだか諦めきれないで今ここにいます。

なんだか今日は心が変な感じ。心が窮屈な感じがする。押し潰されそうなんだ。ぎしぎし音をたてて歪んでいく心を僕はどうすることもできない。今までは思わなかったけれど、こういう感じは初めていいものではないな、ただ辛いだけそう思った。

そんなことを考えていたら、またいつもの夜がやってきた。今日はまんまるの月が日暮れと同時にやってきて、僕が眠るまで付き合っ
てあげるよって言うから、尋ねてみたんだ。この気持ちはなんだろう
うって。そうしたら、「そういうのを『寂しい』って言うのよ。」
って。

その瞬間、急にお母さんのことや、兄弟のことを、可愛がってく
れた赤い屋根の家のおばあちゃんのことを思い出したんだ。今日の
前にいるかのようにありありと鮮明に。僕の眼から知らないしょっ
ぱい水がぽたぽた落ちてきて、僕は懸命にそれを拭った。お月様は
「それを『涙』っていうのよ。」って教えてくれた。そして僕を優
しい薄黄色の淡い光で包んでくれた。

朝が来るまで泣いて、泣いて、泣き疲れて、気付いたら眠ってし
まっていたみたい。目を覚ましたら僕は片田舎のよぼよぼのおばあ
ちゃんの薄汚れた古い家の板の間にいた。僕の背中にはそっとお気
ばあちゃんは僕を無理矢理抱きかかえて「あら、この仔また太った
んじゃない。寝てばかりいるからねえ。」って言って笑った。僕は
その温かい皺くちやの手に安心して欠伸混じりで「ニャー」と一声
鳴いた。おばあちゃんは僕を炬燵に運んでいく。外を見ると雪が降
っていて、靄がかかったように白い。色がないと言えそうだけ
れど、こっちのほうがずっといい景色だなんて僕は思った。一人じ
ゃないっていいなって思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9736n/>

冬の花火

2010年10月9日15時51分発行